
基本ダラダラ駄弁るだけ

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

基本ダラダラ駄弁るだけ

【Nコード】

N3790BA

【作者名】

カーテンコール

【あらすじ】

ミッドチルダのとあるアパートで暮らす1人の青年。冬場は全く外に出ず、炬燵の中で過ごす彼を人々はこう呼ぶ。『こたつむり』と。彼が外に出て、職場へと向かうのはいつの日になるのだろうか？（Arcadiaより移転しました）

こたつむり

「邪魔するぞ」

玄関を開ける音に少し遅れて、六畳一間のワンルームに響いた女性性の声。

部屋の中央に設置した炬燵に潜っていた俺は、そこから顔だけ出して来客の姿を確認した。

「……何をしてるんだ、お前は」

「秘境こたつむり、まさかの全身バージョン」

言いながら、もそもそと炬燵から上半身だけ這い出る俺。

そんな俺を呆れた様な諦めた様な目で見ている、来客の女性。

きりつとした端正な顔立ち、女性にしては結構な長身に平均を大きく逸脱したプロポーシヨン。

長い桜色の髪は、しっかりと纏められたポニーテール。スーツ姿である事から、仕事帰りであろうと推察出来る。

冬場は基本的に職業こたつむりで通している俺を訪ねてくれる、数少ない友人に相違無かった。

「まあそんな所で突っ立ってないで上がりなよ、シグナム君」

「ああ、そうさせて貰う」

彼女はそう言って靴を脱ぐと、俺の向かいに座る。

炬燵の上に常備してある電気ケトルでお茶を淹れて、出してあげた。

「今日はどうしたんだい？ まさか空から女の子でも降って来たのかな？ 2番のバルブでも閉めてるといいよ」

「平気だ、エンジンの調整に抜かりは無い」

……シグナム君に冗談を冗談で返されてしまった。

ちよつといじける。

また全身こたつむりに移行した。

すぐに出た。

「黒だねー。俺的には紫がいいと思うんだよ」

「人の下着を覗き見るのはこの眼球か」

「ぐお、チヨキは駄目だってチヨキは！」

両方のおめめに深刻なダメージが。

目が！ 目がー！

「うぐぐ……いいじゃん別に、減るもんじゃないし」

「減らないのはお前の減らず口だけだ。そんな口はこっつけてくれる」

「いふあいふあい、ひやめふえー」

今度は頬を抓られる。

自分でも驚くぐらいよく伸びた。

「痛い……誰の所為だ」

「元を糺せば自業自得だな」

返す言葉もねーや。

「蜜柑貰うぞ」

「どうぞどうぞ。……しかしシグナム君がこんな時間に来るなんて珍しいね。仕事の方はいいのかな？」

「お前に仕事の是非を問われるのは些か納得がいかないが……まあ今日はたまたまだ」

「何気に酷いし」

もう1度全身こたつむりになろうかと思ったけど、やめた。

チヨキはマジで痛いし。

「命拾いしたな」

「今度は目潰し程度じゃ済みそうにありませんでした。けれど全身こたつむりの良さは、抗い難い魅力があるのです」

何処かの偉い人も言ってたよね。

あれは……いいものだ、って。

「そうなのか……………ふむ」

もそもそ

「いやいやシグナム君、何してんのさ」

君が全身こたつむりしてどーすんのよ。

それ俺の特権。俺の特許。俺の発明（嘘）。

てか君がそれやったら、そのでかい胸が悶えて出れなくなるかもだし。

「……………っ！　むー、むー！」

ほらやつぱり。

仕方ないから炬燵の中でむーむー唸ってるお馬鹿さんを、こっち

側に引っ張り出してやる。

「むう……ぷはっ！」

「平気かい？ エーゲ海」

「……髪が燃えるかと思った」

そっか、災難だったね。

そしてギャグはスルーかい、悲しいね。

「でもまあ、やはり全身こたつむりは俺にしか為せない偉業だったんだね。シグナム君にしてみれば、ただの苦行か」

「苦行は言い過ぎだが、確かにいいものではな……いや」

何故か途中で言葉を止めるシグナム君。

そして俺をじっと見上げている。

こちら側に引っ張り出したから、彼女の頭が俺の膝に乗ってるんだよね。

形としては、膝枕に程近い。

違う所なんて、シグナム君の肩辺りから下が、炬燵にすっぽり入
ってるっただけだし。

「……悪くない」

「そっか。でもこれ、折角のスーツが皺になるけど」

「予備はある。別に構わん」

そう言う問題？

まあシグナム君がいいならいいけど。

特に重くもないし。

「おい、竜胆^{りんとん}」

「うん？」

頷いてたら名前を呼ばれた。

「……頭を撫でろ」

「……………墓場を食べる？」

好き嫌いは無いけど、流石に墓石は食えないって。

幾らなんでも硬過ぎるって。

「母音は合っているが全然違う。私の、頭を、撫でろ」

じーっと見上げられながら、そんな事を言われてしまった。

もしかしてシグナム君、疲れてる？

「……少しだけな」

「心読まれたし」

でもま、それ位ならお安い御用。

「ん……」

言われた通り撫でてあげたら、心地良さそうに目を細めてくれた。

なんか可愛い。すごく可愛い。

口に出したらきつとチヨキでしばかれるけど。

「……………」

「ん？ シグナム君？」

「すう……………」

寝ちゃってるし。

本当に疲れてたっぽい。

けどこれじゃ、俺も動けん。

「…………ま、いっか。どうせ暇だし」

寝ているシグナム君の頭を撫でつつ、俺は片手で蜜柑を剥き始めた。

「むにゃ…………りんご……………」

続・こたつむり

「炬燵に蜜柑、そして渋めのお茶。これぞ日本の冬だと俺は思う」

「ここはミッドチルダだがな」

浸っていたら水を差された。

風情が無いよシグナム君、風情が無いよ!!

「2度言われても知らないが」

「あれ、俺今声に出してた？」

「出てはいなかったが、顔に書いてあった」

まじでか。

そりや猛省。海を割ったのはモーゼ。

……下らねー。

「けれど、そう言いながらもシグナム君だって炬燵で蜜柑してるじゃないか」

「……………今日もいい天気だな」

「外は台風なんですけど」

「ごうごう風が鳴ってるし。」

「……………台風だって人によつてはいい天気だ」

「少なくともシグナム君違うよね。台風の所為で帰りそびれた訳だし」

「そうだな……………む？ 何だ、そう考えてみれば本当にいい天気じゃないか、台風」

「意味わかんねーし」

それに俺は台風嫌い。

だって風とか雨とかうつせーんだよ。

「竜胆、茶」

「はいはい」

「……竜胆茶」

「リンディ茶と発音似てるから止めて」

あれは人間の飲むものじゃない、飽和量軽く超えた砂糖が緑茶の底に溜まってんだよ？

もしかして、シグナム君あんなの飲めるの？

そうなら全力で引くけど。

「飲めないぞ、あんな劇物。シャマルの料理といい勝負だ」

「見た目はそれなりにいいんだけどね」

文字通り見た目だけ。

あそこまで外見と味にギャップがあると、それが逆に凄いと思えてくる。

「ミス・シャルルもあのうっかりさえ無ければいい線いってるのにねえ」

「……竜胆はシャルルのような女が好きか？」

「いや全く」

うっかりは嫌。

「金髪だぞ、男は金髪好きなんだろう？」

「言いがかりだ」

金髪に特別な思い入れは無い。

と言うか髪フェチじゃ無い。

「では何フェチだ」

「フェティシズムから離れて、お願い」

言えない。

舌フエチとか、絶対言えない。

真っ赤な舌に惹かれるとか口に出したら、絶対引かれる。

あ、今つまりこと言った。

「……………アブノーマルな思考をしていそうな気がする」

「読まないで下さい、マジで」

間髪入れず土下座した。

炬燵に潜ってるからシグナム君には見えないだろうけど。

……………今日は紫だ。

「せいっ」

「むぐぐぐっ!？」

首四の字は止めてくれ!

炬燵の中だと真面目に窒息死するから!

「反省と言っ言葉を知らない奴だなお前は」

「ぐぐぐ……ぶはぁっ！……済みませんでした」

危うく三途の川に片足突っ込むところだった。

けどね、意図した訳じゃなかったんだ。

たまたま見えただよ。

「わざとではないのか？」

「そんなつもりは全く無かった」

「……………そうか」

「いだだだだだ！？」

何故かアイアンクローをかけられた。

「頭割れたらどうすんのさ……」

「集めて縫ってやろう」

「俺は縫い包みじゃないからね！？」

危つく顔だけフランケンになる所だった。

そんな自慢できる顔じゃないけど、それは嫌だって。

「ところでシグナム君、頭を離してくれないかな？」

「……ていつ」

頭を引っ張られて、炬燵から引き摺り出された。

そしてそのまま、シグナム君の膝にダイブ。

む、この前と立ち位置が逆だ。

「うおーい」

「お前は仕方の無い奴だから、しばらくこうしている」

「意味が分からんし」

「ふっ……分からなくていいさ、今はな」

打って変わってやたら上機嫌になったシグナム君が俺を離してくれたのは、およそ2時間後だった。

脱・こたつむり？

「脱・こたつむり宣言！ 俺は炬燵に籠る事を止める！！」

「そういう事は炬燵を出てから言うんだな。顔しか出ていない状況で言われても、説得力が欠片も無い」

酷い言われようだ。

けれどそれもまた事実、返す言葉がねーや。

「でも本気なんだ！ 炬燵から出て外に出るんだ！」

「……いつに無く意気込みを感じられるな。どんな風の吹き回しだ？」

俺の堅い意思を理解してくれたのか、シグナム君が心なしに親身になってくれた。

そう、俺は本気なんだ。

何故なら。

「人恋しいのです！」

「……………は？」

「人に会いたいです！　こんな所で炬燵に籠りまくってる俺に会いに来てくれる奴なんて、シグナム君ぐらいなもんだから！」

もう1ヶ月くらいは、シグナム君以外の人の顔を見てない。

おかげで俺のグレイ並みにせせこましい記憶野から、知り合いの顔がどんどん抜け落ちてるんだ。

……確か金髪のツインテールが高町ことたかまっちゃん、赤毛の三つ編みがミス・シャマルだったっけ？

「テストロッサとヴィータだ、それは。ついでに言えばテストロッサが髪を括っていたのは子供の頃の話だぞ」

「そだっけ？」

「……相変わらずの鳥頭だな。少し会わないだけで数年来の知人の顔を忘れるとは」

「うぐ……つってもシグナム君の顔は忘れた事無いし。見なくても完璧に絵に描けるし」

「……………そ、そうか」

無論だとも。

「ま、とにかくだよ。この俺のどこぞの地獄鴉並みに記憶力の無い脳味噌から知人達が引っ越してしまう前に、俺は皆に会いたいんだ」

「ふむ……そういうことなら協力してやるが……普通にやって出られないから、わざわざ私に宣言したんだろう？」

「オフコース！ リブローズ！」

超食いたい。

「なら手を出せ、引っ張り出してやる」

「ありがとう！ そしてギャグはスルーかい、毎度ながら寂しいよ」

俺の両手を掴んで、炬燵の外に引っ張るシグナム君。

これで俺も、ようやく炬燵という名の呪縛から解放たれ

「ん？ ……む？」

「あれ？」

別に引っ掛かってもないのに、なんか抜けないし。

どうなってるのこれ。

「……抜けん」

「ファイトだシグナム君！ 頑張れシグナム君！ その鍛え抜かれたグリズリー並みのパワーで、俺を引き摺り出すんだ！」

「唇塞ぐぞお前」

「ごめんなさい」

怒られた。

しかし、本当に抜けない。

……まさか！

「この炬燵は呪われています、最寄の協会で解呪を行って下さいって奴！？」

「お前FF派だろうが」

「？だけはやりこんだし！ ビアンカー筋だったし！」

「多分関係ないぞそれ」

呪われた装備品なんて嫌だ！

俺はデビリッシュじゃ無いんだぞ！ 呪われないとかそんな都合のいい特殊能力持ってないんだ！

いや、もしくはこれが宝箱ではなく炬燵に擬態したミニミックだったり

「竜胆、よく見たらお前が炬燵の中で踏ん張ってるだけだ」

「……………ホントだ」

余程俺は炬燵から出たくなかったらしい。

まさか無意識下で身体が抵抗するとは。

「はあ……別に今日はいいんじゃないか？ 出たくも無いのに無理矢理は、私としてもどうかと思う」

「むむむ……だけでも」

「1日ぐらい置いても変わらない。それにだ」

それに？

「あれだ……人恋しいなら、私が居る」

「……そうだね」

それなら、いつか。

シグナム君が居れば、それでいいか。

「……………今日は泊まるぞ」

「そりゃ歓迎」

だったら晩御飯作らないと。

冷蔵庫に何が残ってたっけ……。

「っておい竜胆！ 炬燵から出てるぞ！」

「は？ うわマジだ！」

無意識下で抵抗してたと思ったら、無意識に出てしまった。

……もしかして俺、身体の芯から鳥頭？

続々・こたつむり

「それにしても、そろそろひと月半になるな」

「なにが？」

「お前がこたつむりに退化してから」

何を言っただシグナム君！

退化じゃなくて進化なのだよ！

「明らかに退化してるだろうが」

「違うね！ 炬燵に籠っていない俺が成長期だとしたら、こたつむりになった俺は謂わば究極体だし！」

「その有り様でワープ進化したと言い張るか。ウォーグレイモンとメタルガルルモンに謝れ」

なんでさ、俺は正しい事を言ったのに。

「シグナム君は、今の俺が究極体として相応しくないと？」

「100歩譲って成熟期だな」

成熟期かー。そっかー。

じゃあ仕方ない、更なる進化をしよう。

「ならシグナム君とジョグレス進化する。そうすれば完全体」

「…………ふにゃっ」

「どったの奇声なんか上げて」

俺何か変な事言ったか？

「じよ、ジョグレスってお前……」

「要するに合体だよねあれ。よし、合体しようシグナム君」

「……くふっ」

吐血した！？

やべーようすればいいんだよこれ！？

と、とにかく応急処置を。

「シグナム君しっかり！ 傷は浅いぞ！」

「ふふふふ……ああ分かっている、あの川を渡れば……」

「渡っちゃ駄目な川だそれは！！ 戻って来い！！」

「む……？ リンフォースじゃないか、何をしてるんだそんな所で」

「ノオオオオオオオオオオツ！！！！」

シグナム君がこっちに戻ってくるまで、15分かかりました。

「……ハッ！ 私は一体……」

「良かった。戻って来た」

本当に危なかった。

天国のお嬢が引き止めてくれなかったら、あのままヘブンに逝ってたかも知れん、マジで。

良く分からんけど、ジョグレス進化の話題は封印しとこ。

「大丈夫シグナム君？ そうめん食べる？」

「何故冬にそうめんなんだ……イヤガラセか？」

「ぶぶ漬けでもどうぞすか」

「私を追い返したいのかお前は！？」

あれ、違った。

それにしてもシグナム君、このネタ知ってたんだね。

「今時の京都人でも知らないのに。今更だけど、シグナム君本当に異世界人？」

「主はやてから教わった」

あの豆狸、どんな流れで教えたんだよ。

「冗談だから許して」

「どうするかな」

「……こういうところであっさり許してくれる気風の良さって素敵だよ。俺そんな人に憧れちゃう」

「許してやろう」

「ちよろい。」

「ありがとうシグナム君！ お礼に髪を梳いてあげませう」

「……………たによむ」

「によむって何ですか」

「……………頼む」

「無かった事にしないで下さい」

周りからはしっかり者とかクールビューティーとか言われてるけど、シグナム君以外とポンコツなんだよね。

前にレディからニート呼ばわりされてちょっと泣いてた事もあった

たし。

つまり何が言いたいかと言うと、シグナム君はいじめると楽しい。

「ほらほらー、にょむって何ですかー」

「……………くらえ」

「ぐぼらっ！…？」

ラリアットはきついっす…………。

何事もやり過ぎは良くなかったみたい。

「ふん」

「あいてて、ゴメンよシグナム君…………ほらおいで」

「……………」

もそもそ

ぽすっ

「おおっ」

向かい合って座ってたシグナム君が、炬燵を潜って俺の膝に。

そこまで身長差が無いから、びみょーにやりにくいんですけど。

「からかった罰だ」

「照れるくらいならやんなきゃいいのに」

「……………せいっ」

「あぶしゅー！」

頭突きは止めて……………鼻がヤバい。

「さっさとやれ」

「ふぁい……………」

リボンを取って、櫛で梳かす！。

櫛は目の粗い奴から細かいのまでおよそ5段階ね。

「シグナム君の髪はキレイだねー」

「……そうか」

「シグナム君はキレイだねー」

「……………／／／」

ちょっと褒めただけでそうやって赤くなる君は好きだよ。

言ったらまた頭突きされるから絶対言わないけど。

髪の毛のブラッシングが終わった後も、1時間ぐらい膝の上に居座られた。

続々・こたつむり（後書き）

竜胆 呼び方集 その1

シグナム：シグナム君

なのは：たかまっちゃん

フェイト：フェイ

はやて：豆狸

ユーノ：とつとこフェレ太郎

ヴィータ：レディ

シャル：ミス・シャル

ザフィーラ：ザッフィー

リインフォース・アインス：お嬢

リインフォース・ツヴァイ：ちみっ子

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3790ba/>

基本ダラダラ駄弁るだけ

2012年1月10日15時52分発行